

「ベナレスって、どこ？」

遠藤周作、最晩年の『深い河(ディープ・リバー)』を読んで、作家の直感の凄さに感動した覚えがある。我々インド研究者がこつこつと文献を渉猟(しやうりやう)して初めて到達するような発見に感性で迫っているからであるが、その分析はともかく、ここでは、作品の重要な舞台となった街の名称をめぐって、インドのことはを観察してみよう。

インド最大の聖地であり、インドで最も「インド的」とも評されるその街は、筆者などはベナレスと呼び慣らわしてきた世代なのだが、遠藤氏はさすがに公的な正式名称「ヴァーラーナシ」を採用している。ローマ字で翻字すればVārāṇasī(ṅは反舌音)で、ヒンディー語の語頭のv音はw音と容易に交代することから実際には「ワラーナシー」と発音されることが多い。

一方のベナレス。実はこれ英語綴り Benares のローマ字読みにはかならない。お手元の英語の辞書で発音記号をご確認いただければ、むしろ「バナラス」に近く、決してベナレスとは発音されないことがわかるだろう。彼らが日常的に通称として使用する地名は Banāras なのだ。そう、だから、インドへ行って「ベナレスはどこ？」と尋ねても「ベナレスって、どこ？」と問い返されてしまうのが落ちだ。

では、Vārāṇasī と Banāras の2者が存在する事情はどこにあるのか。前者の用例は、2・3世紀頃に成立した原始仏典にも高級絹布の産地として見られるほど

古い。雅語であるサンスクリット語とは異なり、民衆の話しことばに近く地域的にも時代的にもはなはだ多様な言語群をプラークリット諸語と呼ぶが、その1つパーリ語で記された仏典では語頭がb音でBarāṇasīとある。11世紀頃のインドのある文法学者によれば、幾つかのプラークリット語ではサンスクリット語のVārāṇasīがVāṇarasīになると記述されている。つまりr音とṅ音との間に音位転換(metathesis)が起きたというのだ。それが更なる変容をこうむりながら今日の通称Banārasに至ったのだ。一方が固定化された伝統的言語による呼称だったのに対し、他方は自然に変化する日常語による呼称だったわけだ。1つの社会にも体系の異なる複数の言語が重層的に存在するインドの特殊な言語事情を物語る事例と言えよう。

高校生必携の世界地図帳には「ヴァラナシ(ベナレス)」とあって、音引きを3カ所とも省くのはいただけないが、両名併記の背後には長い歴史が潜んでいたことになる。ほかに3つの大都市もコルカタ(カルカッタ)、ムンバイ(ボンベイ)、チェンナイ(マドラス)と併記され、いずれも、「現地での伝統的な名称+(英語由来の名称*)」であることを示している。伝統名への回帰には政治的な思惑もからんでいて、ことばと政治の問題として重要だが、歴史の詳細を知るには順次ベンガル語、マラーティー語、タミル語の知識が必要になる。

(※マドラスはポルトガル語由来)

表紙写真
について

Jambo! 素敵な笑顔をありがとう!

紺野正典 Konno Masanori (東京都足立区立第六中学校)

NEW CROWNの3年生に題材として扱われている国、タンザニアのザンジバル島を旅した。日本人にはあまりなじみのない国であるが、ここは昔から文明の十字路であるだけでなく、青い海と青い空、それに珊瑚礁からなる名高いリゾート地でもある。この島で私はたくさんの現地の人々と出会い、そのどれもがかけがいのない宝物となった。

世界遺産になっているストーンタウンを散策していると、どこからともなく気軽に“Jambo!”と声がかか

る。偶然出会ったムサ(左写真)は、島でも有名なティンガティンガ画家であった。彼にはお弟子さんが5人もいる。私は、彼が描いたティンガティンガの絵を見て息を飲んだ。サバンナに住む野生の動物や鳥は、独特の画風で大胆にデフォルメされて描かれ、アフリカの大地の息吹を謳歌しているように思えた。

私はこの旅に、日本の生徒から預かったたくさんの文房具とメッセージカードを持って来ていた。ムサに頼んで紹介してもらったキジムカジ

小学校(写真右)を訪れると、そこでは数え切れないほどの子どもたちが、遠い国からやって来た私を出迎えてくれた。教室に入ってあいさつをしたあと、子どもたち一人ひとりに片言のスワヒリ語で話しかけ、文房具を渡していった。私がペンを渡したときの、あの輝く笑顔は一体どこから来るのだろう。デジタルカメラで撮ったばかりの写真を見せたときの、あのつぶらな瞳と笑顔。重い荷物をここまで運んで来て本当によかったと思えた瞬間だった。

